

2024年1月28日 青戸教会 「真理が自由を」  
聖書 ヨブ記22章11〜28節、ヨハネ福音書8章21〜36節、高橋克樹牧師

「真理がわれらを自由にする」という言葉は国立国会図書館法の前文に書かれてある有名な言葉です。もちろん、この言葉はヨハネ福音書8章31節以下の聖書箇所を根拠にした言葉です。戦後すぐの昭和23年に公布さ<sup>1</sup>た多国立国会図書館法は憲法と並んで前文を持つ数少ない法律の一つです。前文にこの文言が入られた経緯は、羽仁五郎参議院図書館運営委員長が参議院本会議で行った報告出「真理がわれらを自由にする。この確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と正解平和に寄与すること。これがわが国立国会図書館の設立の使命であります。この法案の前文はこれを明記しています」と語ったそうです。羽仁五郎はドイツ留学中にフライブルグ大学図書館で見た銘文であることを証言していますので、直接聖書から羽仁五郎が取り入れたものではないのです。

歴史家の羽仁五郎は今ではほとんど読まれることのない思想家ですが、わたしが大学生の頃はまだお元気で、大学闘争に対して賛同的な立場でいろいろと発言していました。羽仁五郎というよりは、映画監督の羽仁進の父親と紹介しなければ現代では知らない人が多いのではないかと思います。当時、「都市の論理」という書籍を出版していて、吉本隆明と共に左翼運動のイデオログでした。吉本隆明の本を読むことが当時の大学生にとって、通り抜けなければならぬ登竜門でしたし、羽仁五郎の都市の論理も私は読んだ記憶はありますが、内容はすっかり忘れてしまいました。

いずれにしても、真理が我らを自由にするという言葉は、当時の大学生にとっては刺激的な言葉でした。社会科学分野の書籍を片っ端から読んでみましたが、今考えてみると、肝心のところで理解が及ばないところがあったように思います。それは、西洋の社会科学の書籍の背<sup>1</sup>後には聖書の思想、キリスト教の思想が基本的に底流としてあるからです。そのことが、大学生時代の私にはわからなくて読解に苦労したものです。羽仁五郎も、歴史学者としては最先端の学識を持った人物でしたが、「真理がわれらを自由にする」という言葉が聖書に典の根拠があることを確認していなかったようです。

31節以下を丁寧に見ていくと、イエスは、「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である」と言っています。主イエスに従う弟子として、良い羊飼いである主イエスに養われる羊の群れとして生きることができなのです。このみ言葉は「御自分を信じたユダヤ人たち」に対して語られたとあります。それはその前の30節に「これらのことを語られたとき、多くの人々がイエスを信じた」とあるのを受けて語られた言葉です。主イエスの語られたことを聞いて多くの人々が信じたのです。その人々に主イエスは「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である」とおっしゃったのです。それは、主イエスの言葉を聞いて一旦はそれを信じても、そこに留まることがなく、本当の弟子にならない人もいたことを示しています。そういうことは6章66節を見ると、「弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなつた」とあることから見てわかります。いったんは弟子になっても、主イエスのもとを去っていった人々がいたのです。このようにあるのは、紀元1世紀の当時のヨハネ教会の状況が反映されているのです。主イエスを救い主として信じる信仰とユダヤ教の教えの違いが明確になり、教会への迫害が激しくなっていく中で、いったんは主イエスを信じて教会に加わった人々が、信仰を捨てて離れさっていくということが怒っていたのです。そういう現実を見つめながら、「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である」という言葉を主イエスは語っているのです。

本当の弟子、本当に主イエスに従っていくことで、その救いに預かる者となるためには、主イエスのみ言葉にしっかりと留まることが必要なのです。主イエスのみ言葉にしっかりと留まるといふことは、み言葉を常に聞き続ける者となることです。ところが私たちは、み言葉を聞くのではなくて、自分が受け入れられるみ言葉だけを主イエスのみ言葉だと思い込んで、自分が聞き入れやすいみ言葉だけを受け入れているところがあるのです。自分の思いに心地よい言葉だけを選んでしまっているところがないかどうかを自己点検してみる必要があります。

さて、主イエスのみ言葉にとどまり、本当の弟子になると、私たちは、32節にあるように、「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」と主イエスは言うのです。このことをわかりやすく言うならば、自分の価値観の最上位に主イエスのみ言葉を置くのです。別の言い方をするならば、自分の価値観の最上位に主イエス御自身を置くのです。そうすると、どうなるでしょうか。

私たちは自分の価値観に従って生きる選択を無意識にも決定しています。お金が最上位にたっている人は、お金が決断の基準になります。名誉を最上位にしている人は、自分の名誉という自己満足が行動基準になります。けれども、主イエスのみ言葉を最上位に置く人は、それ以外の価値ある事柄が相対化されることになります。ですから、お金や自己満足観に左右されないで、つまりは罪の支配を受けないで、主イエスの視点で物事が判断できるようになるのです。このようにして、主イエスのみ言葉に留まるならば、私たちはお金や自分自身が榮譽を求めるところで、真理から遠く離れてしまうことがなくなり、真実なる生き方ができるようになります。真実なる生き方へと招く主イエスのみ言葉が真理を知る者へと招き、その真理に留まることで、何者にも左右されないで、真実なる道を進むことができるようになるのです。この道筋を指した言葉が「真理がわれらを自由にする」という言葉の意味なのです。

自由という言葉は、現代においては何ものにも制約されずに、自分の意志通りに生きることだと多くの人は考えるでしょう。制約や規制を受けないことが自由だという考え方です。自由は人間が自分自身を最大限に開花させるうえで重要なものだと一般には考えられています。けれども、個人の自由は決して集団の自由とはなりません。集団の規律を守るためには、個人の自由が規制されることも起こります。この人間が生きる上で自由を保持するために必要なことは、先ほども言ったように、自分の判断基準を相対化させる存在としての主イエスを信じることで、先ほども言ったように、自分の意志を最優先させて行動を決定していったとしたら、私たちは早晩自分の思いというものに潰されてしまいます。自分の思いというものが、自分の人生を潰すことを私たちは体験的に知っています。イエスの時代のユダヤ人たちは、律法を守っていれば救われると思ひ込んでいました。それは律法を忠実の守ることによって、神に認められようと一生懸命だったのです。彼らの価値観は律法に囚われていて、真理が自由をもたらすという道筋に気づいていませんでした。これに対して主イエスは、人が神に受け入れるのは人間の側の努力によるのではなく、神の一方的な愛によるのだということでした。神に愛され、受け入れられるようになることを知った者は、それに応える形で、進んで喜びをもって神と隣人に仕えることができるようになるという真理に気づくことでした。また、神を畏れることを知っている人は、それ以外の者を恐れる必要がありません。そういう人は社会の評価や他人の顔色を伺いながら行動することから自由にされるからです。

「真理がわれらを自由にする」という言葉に込められた主イエスの真意を考えてきましたが、真理と言うと、とても捉えづらい気持ちになります。真理というのは、何か実態のある者ではなく、私たちクリスチャンが真実なる生き方を追い求めていく中で示されるものですし、その道しるべとなるのが主イエスのみ言葉だということを抑えておけば、いいのではないかと思います。